

東京五輪音頭からみる盆踊りとナショナリズム

藤 本 愛

要 旨

本論文は、2020年に東京で開催されるオリンピックに向けてPR されている「東京五輪音頭—2020—」を題材として、戦中から現在に至る新聞やインターネットなどの言説を紐解くことによって、盆踊りをめぐる権力構造を明らかにしようとするものである。

「東京五輪音頭」は1964年の東京オリンピックでの公式テーマソングであったが、2020年の東京オリンピックにおいても、リメイクして「東京五輪音頭—2020—」として復活することとなっている。また2010年代に起こっている盆踊りの流行についても検討する。例えば「すみだ錦糸町河内音頭大盆踊り」の来場者は急増し、盆踊り関連の出版物、イベントも目立っているのである。

さて、盆踊りの流行自体は喜ばしいことではあるが、手放しにこの状況を歓迎する前に少し立ち止まって考えてみたい。明治・大正期には多くの地域の盆踊りに対して、政府や地域の権力から禁止令が出され、民衆の数少ない娯楽であった盆踊りが無数に消滅した。にもかかわらず1964年および今回のオリンピックで盆踊りが選ばれているのは何故であろうか。これが本論文を通しての問いである。

本論文ではまず、1)「1964年東京オリンピックにおける『東京五輪音頭』」として、当時の様子を振り返った上で、2)「2020年東京オリンピックへ向けての『東京五輪音頭—2020—』」で、2017年に公開されたばかりの「東京五輪音頭—2020—」の状況を述べる。次の3)「健康で正常なムード」では、「東京五輪音頭」での肯定的評価が「健康で正常」「日本人としての自覚」などの言葉で語られていることに注目し、かつて民衆の数少ない娯楽の一つであった盆踊りに見られたはずの猥雑さ・プリミティヴさが解毒・漂白されているという点が、現在多く流通する新しい創作盆踊り歌に共通する特徴ではないかと考察する。しかしながら次項の4)「創られた『正調』」では、現在

でも猥雑さ・プリミティヴさの残る大阪府河内地方の河内音頭においても、「正調」と名の付く振り付けが新たに権力側によって創作されてしまった例を紹介する。5)「2010年代の盆踊りの流行」では、現在ブームとなっている盆踊りの様相を概観し、大企業や行政主導のものが増加している点を指摘する。最後の6)「創建せよ、国民娯楽」ではまとめて代えて、戦中の盆踊りを復活させる動きは政府による「国難突破」が目的であったことを指摘し、現在のナショナリズムや排外主義を盆踊りが加速させてしまう可能性を検討する。

はじめに

2020年、東京での二度目の夏季オリンピックが開催されようとしている。前回の東京オリンピックが行われたのは1964年。阿久悠がその頃の様子を「東京五輪音頭」の一節を引きながら以下のように振り返っている。

へオリンピックの晴れ姿 ソレトトント トトント晴れ姿
 というくらいだから、どうやら日本は変わろうとしているようであった。
 敗戦からの自責と自虐の日々を、オリンピックという壮大なイベントを機
 に一気に払拭し、近代国家の晴れ姿を世界に示そうとしている。三波春夫
 の歌声は晴れやかであった。¹

開催年である1964年、オリンピックに合わせて阪神高速道路、羽田空港～浜松町間を結ぶモノレール、そして開催9日前である10月1日には東海道新幹線と、次々に大きなインフラが完成していった。1945年の敗戦以降、高度経済成長を経て復興した日本の姿を国内外にアピールする絶好の機会となったに違いない。アジアで初めて開催されたオリンピックとして、世界中の注目が集まったであろう。

そして2020年に行われる二度目の東京オリンピックもまた、「復興五輪」を

¹ 朝日新聞東京版夕刊 1998年1月20日「阿久悠の愛すべき名歌たち〈39〉」

アピールし²、結果招致が決定した。今回の「復興」とは言うまでもなく、2011年3月11日に起こった東日本大震災および福島原子力発電所事故からの「復興」ということである。ただ今回のオリンピック招致については賛成・反対意見が様々入り乱れ、また国立競技場をはじめとする建設問題や、招致過程での動きや費用など多くのことが問題化し、あまりスムーズに進行しているとは言いがたい。しかしそれでも街中で東京オリンピックグッズが販売されていたり、ボランティアが募集されていたりと、2017年現在、少しずつオリンピックが近づいていると実感することが増えてきている。

さて、オリンピックといえば、競技そのものはもちろんメインではあるものの、開催国の趣向を凝らした開会式・閉会式も観戦する人々の楽しみの一つであろう。2012年のロンドンオリンピックでは映画監督のダニー・ボイル (Danny Boyle) が総合演出を、またテクノ・ユニットであるアンダーワールド (Underworld) が音楽監督を務め、2016年のリオデジャネイロオリンピックでは、同じく映画監督のフェルナンド・メイレルス (Fernando Ferreira Meirelles) らが総合演出を担当した。開催地それぞれの代表的な文化や音楽を楽しみながら、その国の歴史や現在を振り返ることのできる開会式・閉会式は、「平和でより良い世界をつくる」³というオリンピック憲章を鑑みても重要な機会である。そしてまた、自国の文化コンテンツを世界にアピールすることができるという大きなビジネスチャンスである、とも言えるのであろう。

そのようなオリンピックに向けた文化コンテンツの発信について、東京都が2014年に行った検討部会で、前衛音楽家の大友良英は以下のように発言している。

² 朝日新聞東京版朝刊 2013年9月6日「汚染水 理解得られず」

³ 公益財団法人日本オリンピック委員会 web サイト オリンピック憲章1996年版 (http://www.joc.or.jp/olympism/charter/konpon_gensoku.html) (2017年10月15日最終確認)

「日本にしかない独特のもので『盆踊り』ってダサイなと思っていたが、意外と外国の人が聴くとダサイというのではなく、僕らがレゲエを聴いた時のような衝撃があって、他にないビート。『盆ダンス』という名前で注目されだしている。五輪で盆踊りをやるのではなく、もう今から盆踊りが面白いということを日本中・世界中に広めたらいい。」⁴

その大友の声に呼応してか否か、実際に今年2017年8月5日に初開催された渋谷盆踊りにおいて、東京オリンピックのための盆踊り「東京五輪音頭—2020—」が披露されていた。「東京五輪音頭」自体は1964年の東京オリンピックのために作られた曲であるが、それをリメイクして使用したものが「東京五輪音頭—2020—」である。同曲のリリースに伴い、早速特設ウェブサイトやプロモーションビデオ、専用の浴衣、うちわも制作され、東京オリンピック委員会等関係者らの意気込みが感じられる。

しかし、盆踊りが今回の東京五輪音頭のように常に政府やお上から歓迎されてきたかという点、決してそうではない。明治・大正期には数々の禁止令が出され、多くの地域で盆踊りが消滅を余儀なくされた。その一方で第二次世界大戦時下には、「明るい慰安」として国民娯楽を創出せよと盆踊りや鎮守祭の復活が推奨されている。一般民衆・大衆の文化である盆踊りは、その時々の権力の意図のもとで消滅させられたり、またいびつな形で誕生させられたりと、運命を左右されてきたのである。

それでは、2020年の東京オリンピックではなぜ盆踊りが必要とされているのであろうか。2016年のリオデジャネイロオリンピック閉会式における引き継ぎ式で盛んにPRしていたような「クールジャパン」⁵のコンテンツ、すなわちキャラクターやパックマン、安倍晋三内閣総理大臣が扮したスーパーマリオなど

⁴ TOKYO MX NEWS「東京五輪に向け日本文化をどう発信？ 検討部会が発足」（2014年6月5日）〈<http://s.mxtv.jp/mxnews/kiji.php?date=201406056>〉（2017年10月15日最終確認）

のキャラクター、そしてAR技術などの最新技術とは、盆踊りは程遠い存在のように思える。また、新たに創作された「東京五輪音頭—2020—」は、同様にクールジャパン政策で述べられているような「ふるさと名物」⁶ですらない。

そこで本論文では、1964年の東京オリンピックでの「東京五輪音頭」や当時の状況を振り返った上で、現在の「東京五輪音頭—2020—」について述べる。また同時に、昨今にわかに「盆踊り」自体が盛り上がりを見せているが、なぜ今、盆踊りが流行しているのであろうか。その状況および背景についても考察する。

1964年東京オリンピックにおける「東京五輪音頭」

1964年の東京オリンピックに向けて、NHKは独自に、または五輪組織委と共同で様々な音楽を製作している。例えば、「国民歌謡風の明るい愛唱歌『海を越えて友よきたれ』（飯田三郎・曲）、軽快な『オリンピック・マーチ』（古関裕而・曲）、さらにオリンピック序曲、賛歌、ファンファーレといった式典曲など。そのなかでいちばん親しまれたのがこの五輪音頭」⁷と当時の新聞記事は伝える。

「東京五輪音頭」は、1963年6月23日オリンピック・デーに上野の東京文化会館で初披露され、レコードとしてリリースされた楽曲である。作詞は宮田隆、作曲は古賀政男であるが、録音権が開放されており、様々な歌手・レコード会社によって歌い販売されていた。中でも、先に挙げた阿久悠の記事にも見られるように、当時のテイチク株式会社からリリースされた三波春夫のバージョン

⁵ 「日本の魅力」を事業展開するという政策で、内閣府のウェブサイトに「知的財産戦略推進事務局 クールジャパン戦略」というページが設けられている。〈http://www.cao.go.jp/cool_japan/〉(2017年10月20日最終確認)

⁶ 経済産業省ウェブサイト内 平成29年10月「クールジャパン政策について」〈http://www.meti.go.jp/policy/mono_info_service/mono/creative/file/171012Cooljapan_seisakuOct.pdf〉(2017年10月20日最終確認)

⁷ 朝日新聞東京版朝刊 1968年6月1日「東京のうた 波に乗った4年前」

が非常に有名である。また、同名の映画も製作され、こちらも同じく三波春夫が出演している。

本楽曲はNHK 制定かつ東京オリンピック公式テーマソングではあったが、開会式や閉会式で使用されたのではない。開会式前日に後楽園球場にて開催された、東京都主催の東京オリンピック前夜祭において使用されており、東京母の会連合会⁸のメンバーたち1500名が「東京五輪音頭」の踊りに参加したとある⁹。

様々な歌手に歌われ300万枚以上売り上げ大ヒットしたとされる「東京五輪音頭」であるが、しかしながら当時の新聞記事などからは本楽曲について好意的な反応ばかりではなかったことが窺える。1964年9月の読売新聞内では、野口久光氏による以下のような評が掲載されている。

「オリンピック賛歌のひとつとして作られた『東京五輪音頭』（宮田隆詞、古賀政男曲）では三波春夫のテイチク盤がベスト・セラーになっているようですが、これはいかにも品がわるいという悪評も出ています。曲としても国民歌、愛唱歌の肩書きにふさわしいのは『海をこえて友よ来たれ』（土井一郎詞、飯田三郎曲）で、この方がオリンピック・ムードにふさわしいようです。』¹⁰

⁸ 一般社団法人東京母の会連合会。内閣府ウェブサイト内に「若者育成・子育て支援活動 青少年社会貢献活動」として紹介されている。「青少年の健全育成ならびに諸事故防止をスローガンに掲げ、会員相互の総意による自主的な協力により、母親の立場から広く社会公共の福祉に貢献しているボランティア団体です。同会の前身として各地で活動していたころを含めると約66年の歴史があり、戦後間もないころから、警視庁や関係機関・団体と密接な連携をとりながら、青少年の健全育成や非行防止活動、また子供と高齢者の事故防止活動など、さまざまな活動を行ってきました。」とある。〈<http://www.8.cao.go.jp/youth/ikusei/katudou/h26/html/p-64.html>〉（2017年10月20日最終確認）

⁹ 朝日新聞東京版朝刊 1964年10月10日「カッセリ夫人もひと役 民謡踊りに盛んな拍手」

¹⁰ 読売新聞朝刊 1964年9月9日 野口久光「[家庭ジュークボックス] 国歌集や行進曲 オリンピックにちなんで」

また同様に、4年後である1968年の別の新聞記事でも、東京五輪音頭がすっかり過去のものになってしまった様子が伝えられている。

「あれから四年。また五輪の季節がやってきた。が、この五輪音頭、いまや人びとの口にのぼることは少ない。音楽専門家は『国民全体を踊らせようという意図でつくられたうた。大きな集会で、はなやかに流されても、人びとが自然と口ずさむうたではない』と口をそろえる。『心に深く定着するうたではない』ともいう。流行歌として短命だったのは、五輪というワクにあまりにピタリだったためだろうか。オリンピック・サイズでつくられた競技施設がその巨体をもてあましていくように。

東京五輪の立役者東伝太郎前都知事にきいてみた。『五輪音頭？ 歌詞もメロディーも忘れたなあ。そうそう、歌手はたしか三波春夫だった』¹¹

このように、大ヒットしたにもかかわらず、否定的な意見もたびたび見受けられる「東京五輪音頭」は、1963年のリリースから1964年のオリンピックが終わるまでの間の一時的なブームで終わってしまったかのように思われていたのではないだろうか。現在も地域の盆踊りで流される曲の中に、「東京五輪音頭」が含まれている地域もあるようであるが、「東京音頭」ほどメジャーなものではなく、若い人の多くは耳にしたことさえなかったのではないかと思われる。しかし、前述のように2020年オリンピックにおいて、「東京五輪音頭」は再度リメイクして使用されることが決定している。次項では、現在までのところ「東京五輪音頭—2020—」がどのように製作・発表されているかについて確認してゆく。

¹¹ 朝日新聞東京版朝刊 1968年6月1日「東京のうた 波に乗った4年前」

2020年東京オリンピックへ向けての「東京五輪音頭—2020—」

2017年7月24日、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会のある虎ノ門ヒルズ内のオーバル広場にて「東京五輪音頭—2020—」（以下、2020版とする）の発表会が行われている。招致の段階からプロモーションやマーケティング活動を担当する電通によると、「同音頭は、1964年東京オリンピックのテーマソングとして制作され、歌手の故三波春夫さんらの歌唱で知られる『東京五輪音頭』（作詞＝宮田隆 作曲＝古賀政男）を2020大会に向けてリメイクしたもの。組織委では、全国の夏祭りや盆踊りを通じて多くの人に歌い踊ってもらうことで、大会の機運醸成につなげたい考えだ。」¹²と紹介されている。

「東京五輪音頭」は三波春夫を主として、北島三郎、畠山みどり、坂本九など有名歌手らによって、それぞれが様々なレコード会社から音源をリリースしていたが、今回の2020版では、1曲の中に石川さゆり、加山雄三、竹原ピストルの3名の歌手が登場する。また「東京五輪音頭」では4番までの歌詞であったが、2020版ではパラリンピックも念頭に置いた歌詞が付け加えられ、5番まで歌われる。8月3日には動画共有サービス youtube にてミュージックビデオ¹³、および特設ウェブサイト¹⁴が公開された。

youtube にて公開されたミュージックビデオには、石川さゆりら歌手やダンサーたちだけでなく、アナウンサーの古舘伊知郎、お笑い芸人で本ミュージックビデオの演出も行っている小林賢太郎なども出演している。またミュージックビデオのクリエイティブディレクターとして、リオデジャネイロ五輪閉会式における引き継ぎ式も担当していたCMディレクターである佐々木宏、同じく音楽制作として椎名林檎といったように、豪華絢爛な面々が名を連ねてい

¹² 電通報 2017年7月26日「あの「東京五輪音頭」が2020年に向け、リメイクして復活！」〈<https://dentsu-ho.com/articles/5346>〉（2017年10月20日最終確認）

¹³ 「東京五輪音頭—2020—ミュージックビデオ／ TOKYO GORIN ONDO 2020 (Music Video)」〈<https://youtu.be/bQo-ZZBKGE>〉（2017年10月20日最終確認）

¹⁴ 公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会 東京五輪音頭特設ウェブサイト 〈<https://tokyo2020.jp/jp/special/ondo/>〉（2017年10月20日最終確認）



図1 東京五輪音頭—2020—特設ウェブサイトトップページ

る。内容としては、渋谷の街から古館伊知郎が実況中継を始めるところから始まる。1964年の東京オリンピックから現在の映像へと順に再生しながら「思えばあの時代、高度経済成長、夢の超特急、月日は一気に流れて東京タワーからスカイツリーへとそのバトンは渡されて、街は移ろった。しかし、日本の空は変わらない。」とアナウンスを入れる。次に宇宙服を着た石川さゆりが上空から登場し、東京オリンピックの浴衣を着たダンサーたちの中心で歌い始める。その後、竹原ピストル、加山雄三も登場し、最後は花火が上がってフィナーレになる、というものである。振り付けは全身を使うものと、車椅子に乗って踊るものとの2種類が用意されており、ダンサーのうち数名は車椅子に乗って踊っている。外国人のような方々も数名一緒に踊っており、多様性に配慮したのであることが窺える。

ミュージックビデオを見る限り、多くのプロフェッショナルの力を結集し、非常によく作り込まれた完璧な作品のように写る。車椅子の方や外国の方も皆一緒に笑顔で踊っており、平和で非の打ち所がないミュージックビデオだ。振り付けについても、「小さいお子さんから、大人の方まで、みなさんに踊っていただけるように、振付家である井手茂太さんに振り付けを考えてもらいました。昔からなじみのある音頭の振り付けをベースにしなが、オリンピックの



図2 東京五輪音頭—2020—ミュージックビデオ

新競技をイメージした振りを入れたりしているの、ぜひ踊ってみてください。」と特設ウェブサイトに親しみやすい記述まである。

しかし、激しい腕の動きを含むこの振り付けは、お年寄りも一緒に踊ることができるのであろうか。もしかすると「大人の方」には、お年寄りは含んでいないのであろうか。「昔からなじみのある音頭の振り付け」とは一体どの地域の何の音頭のことを指しているのか。昔からとはいつからなのか。そして本当に「日本の空は変わらない」のであろうか。

穿った質問なのかもしれないが、そのような見方をすれば、よく見るとミュージックビデオにお年寄りは出演しておらず（80歳の加山雄三はいるが）、振り付けから類推するに「音頭」というのは恐らく東京などの盆踊りで頻繁に踊られている「東京音頭」のような盆踊りのことであり、同じ「音頭」でも決して河内音頭などではなさそうである。とすると「昔から」というのは「東京音頭」等の新しい盆踊りが創られた昭和以降ということなのであろう。日本の空だって、公害や放射能汚染、地球温暖化などによって、その都度変化してきたはずである。

特設ウェブサイトには「HAPPY & PEACE」¹⁵という言葉が登場する（表1参照）。「ハッピー&ピース」は振り付けにも活かされているが、その「ハッピー&ピース」を演出するために、何を取り入れ何を隠すかという、取捨選択が

なされているとも言えるのではないだろうか。振り付けについて「小さいお子さんから、大人の方まで、みなさんに踊っていただけるように」とあるが、「みなさん」とは本当に誰でも彼でも含まれているわけではなく、実際は選ばれた「みなさん」のことなのではないだろうか。

2020年のオリンピックに向け、改めて2020版を製作することとなったのは、「東京五輪音頭」が意図したように大ヒットし、高評価を得ることができたということも理由の一つであろう。前項では新聞記事における否定的な意見をいくつか紹介したが、次項では肯定的評価がどのようなものであったのかを確認する。

「健康で正常なムード」

1964年12月23日の読売新聞夕刊に「健康で正常なムード」という見出しで以下のような記事が掲載されている。「ことしのレコード界」という名のコーナーで、年末にふさわしく1964年を振り返る内容が記されているのであるが、本論文における重要なキーワードがいくつも含まれているため、少し長くなるが引用しておく。

「戦後二十年たった日本人の好みは、どうやらすっかり落ち着きをとりもどしたようだ。あの混乱の時期にみられたような、奇をてらったヒステリックな歌はすっかり姿を消し、まどもな歌がヒットするようになった。ことしのレコード界を代表するものは、オリンピック・ムードに便乗した

¹⁵ 特設ウェブサイト（前掲サイト）のミュージックビデオ紹介欄に「3年後の今ごろは、ちょうど東京2020大会の真っ最中。世界からやって来た方々に「顔と顔」を合わせながら、楽しんで頂きたいですね。そんな気持ちを込めて東京五輪音頭—2020—、復活させました。歌ってくれるのは石川さゆりさん、加山雄三さん、竹原ピストルさん。歌詞も振り付けも2020仕様です。この夏、ご近所のお祭りでも流れるかもしれないので、ぜひ踊ってみてください。車いすの方にも踊りやすい振り付けも、ご用意しています。エンブレム柄の法被や浴衣も作りました。気分は、一足早い開会式です。HAPPY & PEACE!」と記載されている。

『東京五輪音頭』から不景気ムードをふんまえた（筆者注：原文ママ）『お座敷小唄』にリレーされ、また一年を通して“青春純愛路線”が、レコードの最も大きな購買層といわれる若い世代に強力にアピールし、この三つの柱を中心に動いてきた。

（中略）

以上、四人の談話でわかるように、ことしの日本人好みは正常も正常、まことに健康だったといえるのではなからうか。正常な神経の持ち主が、正常な歌を歌っていると、目立たないものだ。エキセントリックな歌をヒステリックな歌手が歌うと、非常に大衆に刺激的に聞こえる。だから、その年はなにか収穫があったように錯覚しがちだが、ことしのように健康だと、なにか活気がないように錯覚してしまう。しかしたずらにとっぴなものや、安易な外国渡来のものばかりに迷わされることなく、日本人が日本人としての自覚を持った上で、自分の心の求めるものをすなおに選択したということでは、喜んでいいのではなからうか。¹⁶（傍点は筆者による）

他の新聞記事においても1964年の流行曲を振り返るものは同様の論調のものが多かったが、ここで描かれているのは、「東京五輪音頭」を含む、その年に流行した曲について「まともな歌」「正常、まことに健康」「正常な神経の持ち主が、正常な歌を歌っている」「日本人が日本人としての自覚」とする評価、つまり「健康で正常」であり「清く正しい」ということである。

「東京五輪音頭」は、創作された盆踊り歌である。しかし冒頭でも述べたように、盆踊りは明治・大正期に数多く禁止令が出され、消滅してきた。すなわち時の権力が禁止しなければならないほどのものであったということである。現在盆踊りというと「死者の霊を鎮魂するもの」¹⁷という説明が付きがちであるが、娯楽の少ない時代の盆踊りは、決してそれだけの要素ではなかった。大

¹⁶ 読売新聞夕刊 1964年12月23日「ことしのレコード界」

阪府の北河内地方で江州音頭の音頭取りであった初代桜川唯丸も証言するように、戦後すぐの盆踊り会場であってもまだ男女の出会いの場として機能していたそうである。夕方から翌朝まで行われていた盆踊りで、草むらに消えてゆく男女を何組も櫓の上から目撃していたという¹⁸。そのような面も持つもとの盆踊りを「健康で正常」と権力が判断するものであれば、わざわざ禁止する必要などないはずである。

すなわち、「東京五輪音頭」は「健康で正常」とするために、盆踊りがかつて禁止されるほどに持っていた猥雑さやプリミティヴさを解毒・漂白したものが創り出されたとと言えるのではないだろうか。恐らく冒頭で紹介した大友良英の「『盆踊り』ってダサイなと思っていた」という発言は、そういった解毒・漂白されてしまった種類の、現在多く流通している盆踊りのことを指していると考えられる。ホブズボウムが『創られた伝統』で「伝統が創り出されるのは古いやり方がもはや通用しなくなったり、適さなくなったからではなく、故意に用いられなかったり、適合させられなかったりするからだとも考えられよう」¹⁹と述べているが、盆踊りについてもまさに同じ状況が起こっている。現在も生演奏で盆踊りが行われる地域であれば、歌手による自由で即興的な、また時に猥雑な歌詞を耳にする機会は存在する。しかしレコードやテープ・CDなどの音源を使用して行われる盆踊りでは、誰が聞いても苦情の出ない歌詞であらねばならないし、ましてや即興的に踊り手や観客が楽しくなるような歌詞を入れることなどできないのである。

ホブズボウムはまた、「昔のやり方が生きているところでは、伝統は復活したり創り出されたりする必要はない」²⁰と述べている。筆者がフィールドワー

¹⁷ 渋谷文化 PROJECT ウェブサイト「【レポート】109前で「渋谷盆踊り」が初開催—外国人旅行者らの参加も」〈<https://www.shibuyabunka.com/phone/blog.php?id=891>〉(2017年10月20日最終確認)

¹⁸ 筆者による初代桜川唯丸へのインタビューより

¹⁹ エリック・ホブズボウム、前川啓治訳、1992「序論—伝統は創り出される」(『創られた伝統』所収 紀伊國屋書店) p.18

クを続ける大阪府河内地方で行われる河内音頭・江州音頭は、現在も生演奏で盆踊りが行われている。音楽の面ではエレキギターやシンセサイザーを取り入れたり、オリジナルの歌詞を作詞したりと、その時代に合った新しい潮流を取り入れながら進化するというスタイルで、そして踊り手の側も「一丁目から十丁目まであったらそれぞれ違う踊り方があった」²¹と述べるように、一つの「正しい」定型があるというのではなく、各人が基本をもとにしながら自由にアレンジして踊るという形態をもって河内音頭・江州音頭はこれまで続けてきた。しかしそのような「昔のやり方が生きている」地域であっても、権力側が伝統を創出しようとしてしまう動きが時に見られる。次項ではその一例として、八尾市によって2016年に創出された「八尾正調河内音頭踊り」について述べる。

創られた「正調」

河内音頭は盆踊りとしては、大阪府河内地方を中心に奈良を含む近隣地域で親しまれている。ここでは河内音頭の音楽的特徴などは詳述しないが、全国的には鉄砲光三郎や河内家菊水丸が有名である。河内家菊水丸が求人情報誌のテレビコマーシャル²²で歌っていたように、河内音頭とは「東京音頭」や「炭坑節」、そして「東京五輪音頭」などの盆踊り歌とは異なり、詞や楽曲の長さ、構成などは各音頭取りの裁量に任されている。

踊りについても同様に非常に自由度の高い盆踊りである。前述したような盆踊りのように、決められた「正しい」振り付けがあるわけではない。ゆるやかな基本形が3種類²³ほどあるが、それらもアレンジして皆それぞれが好きなように同じ輪の中で踊る。そのため「東京音頭」などの盆踊りに慣れた人から見ると、踊りの輪で繰り広げられる様々な振り付けの中で、何が正しい振り付け

²⁰ 前掲書 p.18

²¹ 筆者による河内音頭の踊り子Oへのインタビューより

²² 1991年に放映されていたリクルートのアルバイト情報誌「フロム・エー」のテレビコマーシャル。河内家菊水丸「カーキン音頭」(PCDY-00084)が使用されていた。

²³ 手踊り、流し、マメカチと呼ばれる3種類が基本的な踊り形態である。

で、どの踊りを真似すれば良いのか分からなくなるという。そのため「踊りをきちんと揃えてほしい」という外部からの苦情が市役所などに入ったりすることもあるようだ。

ただ、それら河内音頭の中で、「正調」と呼ばれているものがある。八尾市常光寺の地藏盆で行われる「流し節正調河内音頭」と呼ばれるものである。これはもともと「流し節正調河内音頭」と呼ばれていたわけではなく、「昭和初期に当地区の音頭取り有志が『流し節正調河内音頭』としてSPレコードに吹き込み、『河内音頭』と初めて表示して以来、流し音頭も一様に『河内音頭』と呼称されるようになりました」と常光寺のウェブサイトで記述されているように、かつては河内音頭の一つとは考えられておらず、単に「流し」や「八尾の流し」と呼ばれていた。現在も8月23日24日に開催される地藏盆で、概ね21時頃までの前半にこの「流し節正調河内音頭」が、流し節正調河内音頭保存会によって行われ、そして後半に現地ではよく知られる現代スタイルの河内音頭が行われる。「流し節正調河内音頭」は、現代スタイルの河内音頭とは全く異なるものであるが、地域の踊り子たちはそれを「正調」と呼んでおり、そこに疑問の声を聞くことはほとんどない。

しかし2016年10月、なんと新たに「正調」が創られたのである。常光寺の「流し節正調河内音頭」は、音楽も踊りも現代スタイルの河内音頭とは異なるのであるが、新たに創作された「八尾正調河内音頭」は、現代スタイルの河内音頭に合わせて踊るための振り付けのことである。この「八尾正調河内音頭」は、手踊りと呼ばれる河内音頭の基本的な形に似てはいるが、少し手の動きなどに特徴があり、普段の音頭場でこの振り付けを目にしたことは一度もない。

もともこの振り付けが用意されたのは、主にギネス記録認定のためであろう。2017年9月9日に世界最多数で踊る盆踊りとして「八尾河内音頭祭り」でギネス世界記録に挑戦²⁴し、見事認定されたというものである。認定のため

²⁴ 参加条件などの詳細は、八尾河内音頭まつり振興会ウェブサイト参照（<http://www.yaokawachiondo.com/2017fes/guinness>）（2017年10月22日最終確認）

には5分間参加者全員が全く同じ踊りを踊る必要があり、当日集まった2900人のうち、振り付け間違いなどの理由によって失格となった28人を除いた2872人として認定された。河内音頭は前述のように自由度の高い盆踊りであるため、本来音頭場では無数の種類の踊りを目にすることとなる。そのためいくら大人数が集まっても「世界最多人数で踊る盆踊り」としてギネス記録の認定はされない。よってギネス記録認定を目指すためには振り付けを揃える必要があったのである。

ギネス記録挑戦自体は、普段は踊りも音頭場へ来る目的もバラバラな踊り子たちが同じ目的を持って参加でき、一体感を持って全員で盛り上がるができるため、地域として非常に良い試みであると思われる。また、参加者全体の5%が踊りを間違えると失格となるため、事前に練習を積む必要があった。踊り子の一人は新聞取材のインタビューに「普段はもっと崩した振り付けで踊っている。今回はきっちり型が決まっているので、当日までにもっと練習します」²⁵と答えている。日頃から河内音頭に親しむ踊り子たちが改めて練習をするというのはほとんどないことであり、地域住民の関わりという意味でも貴重な経験となったに違いない。

しかしながら、踊り子たちにとって「正調」といえば、やはり常光寺の「流し節正調河内音頭」のことである。そのため同じ「正調」という名称を付けることに否定的な声を何度か耳にした。筆者としても、何かを「正調」としてし



図3 八尾河内音頭まつり振興会ウェブサイト、河内音頭でのギネス世界記録への参加を呼びかける画像

²⁵ 朝日新聞大阪版朝刊 2017年8月24日「ギネス挑戦 河内音頭の輪」

まうことで、それ以外は「正調」ではなく「亜流」であると、外部や後世に判断されかねないのではと懸念を覚える。ただ河内音頭のように、年中どこかで踊られているような、地域に定着し切った文化であれば、恐らくこのような心配は杞憂に終わることであろう。

さて、この河内音頭であるが、東京の墨田区錦糸町においても毎年大きな祭りが開催されている。1981年に河内音頭愛好家グループである「全関東河内音頭振興隊」²⁶が始めたもので「すみだ錦糸町河内音頭」（以下、錦糸町河内音頭とする）と呼ばれるものであるが、全国で祭りの自粛が頻発した2011年も開催し、2017年で第36回目を迎えた。筆者はこのグループで2007年よりフィールドワークを続けているが、メンバーとして加入した当初は宣伝・集客に奮闘することが多かった。しかし2013年頃からはその様相が一変し、いかにして非常に多くの人が集まる催事を、事故なく行うかということに主眼が置かれはじめた。昨今では錦糸町河内音頭に来る人々が、まるで聖地巡礼のように、本場大阪の音頭場を訪れるということも増えてきているのである。もともと祭りの参加人数自体は大勢いたのであるが、昨今は混雑して危険な状況にまで進んでいる。なぜこのようなことが起こっているのだろうか。次項では、2013年頃から起こった変化について考察する。

2010年代の盆踊りの流行

前項の最後に述べたように、錦糸町河内音頭の参加人数が2013年頃から急激に増加した。運営を担う首都圏河内音頭推進協議会の会議においても、どのようにして大人数の来客と怪我や事故なく催事を無事行うかについて、昨今は大きなウェイトを占めるようになってきている。近年人気が増しているのは、河内音頭のみで特別起こっている現象ではなく、その他の盆踊りも同様であるように見受けられる。では、昨今なぜ都市の若者の盆踊りへの評価が向上してい

²⁶ 現在は改組し「首都圏河内音頭推進協議会」という名称で活動している。

るのであろうか。ここではその状況についてまず確認しておこう。

まず、恐らく若者文化の中で盆踊りが改めてクローズアップされるきっかけとなったのは、冒頭で言及した大友良英らが主催した「プロジェクト FUKUSHIMA!」²⁷の企画である「納涼！盆踊り」の「ええじゃないか音頭」ではないだろうか。大友自身は2013年上半期に放送されたNHK連続テレビ小説「あまちゃん」の音楽を担当していたことで、彼が演奏してきたような前衛ジャズやノイズ音楽を聴かない層にも広く知られる存在となっていた。第3回目の「プロジェクト FUKUSHIMA!」で開催された2013年8月15日の「納涼！盆踊り」では、そこでは「あまちゃん」テーマ曲をアレンジした「あまちゃん音頭」も披露された。

「ええじゃないか音頭」は、大友によって作曲・プロデュースが行われ、歌詞・編曲は「プロジェクト FUKUSHIMA!」のメンバー全員で行ったものということである。「ええじゃないか音頭」について、大友は次のように述べている。

「音頭は通常地元讃歌です。でも、あえて僕らはそこに、単なる讃歌ではないものを込めようと思います。幕末に大流行した『ええじゃないか』が単に楽しく踊るだけのものではなく当時の世相を反映した、言葉に出来ぬ庶民の叫びだったのを想像してみればわかりやすいかもしれません。震災後の言葉に出せないようないろんな事情もぐっと呑み込んだ人生讃歌。福島生まれの音頭が、どこの土地でも、どんな状況にでも通じるような、酸いも甘いも噛み分けた、シャレも風刺も効いた大人も子供も老人も楽しめる盆踊りになっていたら最高じゃないかな。しかもみんなで楽器を持ち

²⁷ 2011年5月に「プロジェクト FUKUSHIMA! 実行委員会」として、詩人の和合亮一、音楽家の遠藤ミチロウおよび大友良英によって「2011年8月15日、福島で、音楽を中心としたフェスティバルを開催します。また、これをきっかけに様々なプロジェクトを長期的に展開していきます。」から始まる宣言文が出された。それ以降毎年8月15日に福島市において行われているフェスティバル。宣言文全文は〈<http://www.pj-fukushima.jp/about/2011.php>〉参照。(2017年10月22日最終確認)

寄って演奏し踊れる盆踊り。そんな大それたことを考えています。』²⁸

その後「フェスティバル FUKUSHIMA!」の盆踊りは毎年8月15日に福島で行われている他、2013年9月27日には六本木ヒルズの企画展「六本木クロッシング2013」のスペシャルイベントとして開催されたり、また同年の「あいちトリエンナーレ」、2014年の「札幌国際芸術祭」、2014年から毎年「フェスティバル／トーキョー」などのアートフェスティバルでのイベントとして行われたり、そして商店街や大学など、様々な場所で親しまれるようになってきている。

このムーブメントの影響であるかは確認しようがないが、2014年頃より盆踊りに関連する書籍、しかも民俗学などの研究・専門書ではなく一般書の出版が増加したのである。ざっと確認する限りでも、2014年には『盆おどる本—盆踊りをはじめよう』、2015年には『今日も盆踊り』、『ニッポン大音頭時代』、2016年には『ニッポンのマツリズム』など、その他日本の祭りに関する雑誌・書籍を含めると、この数年の間に盆踊りや夏祭りを扱う出版物が非常に多くなっている。

ただしここで注意しておきたいのは、「フェスティバル FUKUSHIMA!」と



図4 ISETAN BONDANCE 2017 ウェブサイト

²⁸ 「プロジェクト FUKUSHIMA!」ウェブサイト内 大友良英「納涼！盆踊り」〈http://www.pj-fukushima.jp/page/bon_message01.php〉(2017年10月22日最終確認)

して行われている「ええじゃないか音頭」は、「決して現状肯定する音頭ではありません。むしろ、痛切な批判がこめられています。」²⁹とウェブサイト上で述べられているように、実は「東京五輪音頭」のような「健康で正常」なものでも、「東京五輪音頭—2020—」のように「ハッピー&ピース」でもないという点である。筆者自身は「フェスティバル FUKUSHIMA!」が若者に盆踊りを再発見させる重要な契機であったと考えているが、しかしながら、昨今流行している盆踊りにはそのような批判性は見られない。

例えば、2017年7月には大手デパート伊勢丹新宿の屋上において「ISETAN BONDANCE 2017」が行われたが、7月1日2日に開催されたイベントは「おしゃれ盆踊り vol.3」と銘打ったもので、「ファッションブランド KEITA MARUYAMA のデザイナー丸山敬太氏がプロデュースする“おしゃれな盆踊り”イベント。豪華なゲストライブ、オリジナルの盆踊りで、素敵なお夏の夜を過ごしませんか。」³⁰と書かれている。「ISETAN BONDANCE」は2015年から毎年開催されており、2017年は入場料が4000円（ドリンク／フードチケット付）でドレスコードは浴衣と決められているのであるが、毎年非常に人気のあるイベントのようだ。

一方2017年8月5日には、渋谷道玄坂の SHIBUYA109前で道路を封鎖して「渋谷盆踊り」が初開催された。渋谷文化 PROJECT ウェブサイトには「今回の盆踊りは、渋谷道玄坂商店街振興組合を主催とし、渋谷道玄坂青年会を中心に企画や準備を進められてきたもので、あくまでも街の活性化を目指す商店会主導の手作りイベント」と記載されているが、内容としては、第一部は渋谷区による「渋谷区基本構想」のPRソング『夢みる渋谷 YOU MAKE SHIBUYA』の盆踊りバージョンを歌手の野宮真貴が歌った後、第二部は東京オリंपィ

²⁹ 「プロジェクト FUKUSHIMA!」ウェブサイト内「about」〈<http://www.pj-fukushima.jp/about/>〉（2017年10月22日最終確認）

³⁰ ISETAN 新宿店ウェブサイト内「ISETAN BONDANCE 2017」〈<http://www.isetan-guide.com/2017/bondance/>〉（2017年10月22日最終確認）

ク・パラリンピック競技大会組織委員会による「東京五輪音頭—2020—」、第三部は携帯電話会社 au のスポンサー枠、第四部は「スタンダードな盆踊り」という構成になっており、こちらは非常に行政色と大企業色の濃いイベントのように感じられた。

このように、「痛切な批判を込めている」という「プロジェクト FUKUSHIMA!」での盆踊りが現在の盆踊り流行の皮切りとなっているものの、昨今は大企業や行政主導による盆踊りが増加していることが現在の特徴である。それではここで、当初の課題であった「なぜ盆踊りが必要とされているのか」について考えてみたい。その際に参考になるのは、過去に盆踊りが必要とされたのはどのような時であったのかを振り返ってみることである。

創建せよ、国民娯楽

1940年7月13日の新聞に「創建せよ、国民娯楽 “明るい慰安”を村に、工場に 盆踊、鎮守祭も復活へ」という見出しの記事がある。まさに戦中の記事であるが、「戦争のために我が国の娯楽が国民の求めるものからかけ離れてきていないか」と問うた上で、「国民娯楽」を創建し、「その娯楽の泉から国難突破の国民的元気を汲みとりたいものだ」とする内容である。記事の中では、文部省映画演劇劇音楽等改善委員会委員であった権田保之助が「娯楽機関の全国的配分」を提案した、ということが書かれている。見出しにもある盆踊り、鎮守祭については「農村対策」として提唱されており、次のように述べられている。

この盆踊りなどは事変以来農民の緊張を緩めるものとして多くは中止されていたが、民衆がうち揃って手をつなぎ、足拍子面白く踊る郷土の喜び、また土地の古い伝統の染みこんでいる鎮守のお祭りなどは民衆の慰安として、誇りとしてむしろ奨励しようとなったものである³¹

このように、過去に盆踊りを復活させる機運が上昇したのは戦中のことであった。国難突破するために「国民娯楽」を創出し、国民的元気を汲み取る。そのために過去に禁じられていた盆踊りが復活するところもあるのであろうし、既にすっかり消滅してしまったところもあったはずである。

それと似たような文言が、先に紹介した1964年の東京オリンピックにおける「東京五輪音頭」を含むヒット曲に対する評価の中にも見受けられた。「安易な外国渡来のものばかりに迷わされることなく、日本人が日本人としての自覚を持った上で」³²という表現は、オリンピックを経験することによって生まれた愛国心から来ているのであろうか。それともまた別の、不景気などの「国難」があったのであろうか。

このところテレビ番組などで、いわゆる「日本すごい系」³³番組が非常に多くなっており、また一方でヘイトデモなど排外的な動きも目立っている。そのような状況で盆踊りが流行していることについて、過去の歴史から鑑みるに、個人的には一抹の不安を覚えずにはいられない。小沢昭一も著書『日本の放浪芸』の中で、1974年当時の「日本回帰」の流行について次のように述べている。

ところで「人間性回復」「公害問題」がクローズアップされたころから合言葉になって、機を見るにさといテレビコマーシャルなども、いっせいに“古きよき昔”を切りとって商売にむすびつけ、流行歌も「格子戸をくぐりぬけて」ありもしない「夕焼け空を見上げる」ようになった。

(中略)

じつは私はこここのところ毎年の正月に、尾張の「万歳」の、わずかに残る古老と一緒に門付をやっているのであるが、去年の正月から明らかにオ

³¹ 朝日新聞東京版朝刊 1940年7月13日「新しき国民生活⑦ 創建せよ、国民娯楽“明るい慰安”を村に、工場に 盆踊、鎮守祭も復活へ」

³² 読売新聞夕刊 1964年12月23日

³³ プレジデント online 西森路代「『日本すごい』に流されないNHKの新番組」〈<http://president.jp/articles/-/22886>〉(2017年10月22日最終確認)

モライが多くなった。親が子供に「これは万歳といってね、昔はよく来たもんなんだ」などと説明し、懐古を子供に押しつけながら、喜んでお金も余計に出すのである。“ディスカバー・ジャパン”はこんなところにも普及して、“日本の昔”を珍重するのであった。

こういう一つ一つの現象はどうと言うこともないが、そういう「回帰」が合わさってひょっとして「信仰」までよみがえらせるということはないだろうか。そしてそれだけならいいが、それがあの少し前にあった、「国をあげての信仰」にまたぞろつながるといことにはならないであろうか。よもやそういうことはないであろうけれど、あの「信仰」でひどく懲りたものにとってはこれは神経質にならざるをえない。

もしそうなるなら、私の「日本の放浪芸」も、そういう「信仰」復活のお先棒をかついだことになってしまうのではないかと、いま気になって仕方がないのである。³⁴

当時の小沢の心配は幸いにも結局杞憂に終わったが、盆踊りなどの民衆文化は常に民衆の意図しないままに権力に利用される危険を孕んでいることは間違いない。現在声高に叫ばれている「国難」によって民衆文化がどのような未来を辿るのか、我々は十分に気をつけていなければならないだろう。

【謝辞】

本研究はJSPS科研費15K12961の助成を受けた研究成果を一部使用しています。

【参考文献・ウェブサイト等】

- 朝日新聞東京版朝刊 1940年7月13日「新しき国民生活⑦ 創建せよ、国民娯楽 “明るい慰安”を村に、工場に 盆踊、鎮守祭も復活へ」
朝日新聞東京版朝刊 1964年10月10日「カッセリ夫人もひと役 民謡踊りに盛んな拍手」

³⁴ 小沢昭一、2006『日本の放浪芸 オリジナル版』岩波書店 pp.205-207

- 朝日新聞東京版朝刊 1968年6月1日「東京のうた 波に乗った4年前」
- 朝日新聞東京版夕刊 1998年1月20日「阿久悠の愛すべき名歌たち〈39〉」
- 朝日新聞東京版朝刊 2013年9月6日「汚染水 理解得られず」
- 朝日新聞大阪版朝刊 2017年8月24日「ギネス挑戦 河内音頭の輪」
- ISETAN 新宿店ウェブサイト内「ISETAN BONDANCE 2017」〈<http://www.isetan-guide.com/2017/bondance/>〉(2017年10月22日最終確認)
- 小沢昭一、2006『日本の放浪芸 オリジナル版』岩波書店
- 経済産業省ウェブサイト 平成29年10月「クールジャパン政策について」〈http://www.meti.go.jp/policy/mono_info_service/mono/creative/file/171012CooljapansaisakuOct.pdf〉(2017年10月20日最終確認)
- 公益財団法人日本オリンピック委員会 web サイト オリンピック憲章1996年版 〈http://www.joc.or.jp/olympism/charter/konpon_gensoku.html〉(2017年10月15日最終確認)
- 公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会 東京五輪音頭特設ウェブサイト 〈<https://tokyo2020.jp/jp/special/ondo/>〉(2017年10月20日最終確認)
- 渋谷文化 PROJECT ウェブサイト 「【レポート】109前で「渋谷盆踊り」が初開催—外国人旅行者らの参加も」〈<https://www.shibuyabunka.com/phone/blog.php?id=891>〉(2017年10月20日最終確認)
- 電通報 2017年7月26日「あの「東京五輪音頭」が2020年に向け、リメイクして復活！」〈<https://dentsu-ho.com/articles/5346>〉(2017年10月20日最終確認)
- TOKYO MX NEWS「東京五輪に向け日本文化をどう発信？ 検討部会が発足」(2014年6月5日) 〈<http://s.mxtv.jp/mxnews/kiji.php?date=201406056>〉(2017年10月15日最終確認)
- 「東京五輪音頭 -2020- ミュージックビデオ / TOKYO GORIN ONDO 2020 (Music Video)」〈<https://youtu.be/bQo-ZZBKGLIE>〉(2017年10月20日最終確認)
- 内閣府ウェブサイト「知的財産戦略推進事務局 クールジャパン戦略」〈http://www.cao.go.jp/cool_japan/〉(2017年10月20日最終確認)
- 内閣府ウェブサイト内「若者育成・子育て支援活動 青少年社会貢献活動」〈<http://www8.cao.go.jp/youth/ikusei/katudou/h26/html/p-64.html>〉(2017年10月20日最終確認)
- プレジデント online 西森路代「『日本すごい』に流されない NHK の新番組」〈<http://president.jp/articles/-/22886>〉(2017年10月22日最終確認)
- 「プロジェクト FUKUSHIMA!」ウェブサイト内 宣言文 〈<http://www.pj-fukushima.jp/about/2011.php>〉参照。(2017年10月22日最終確認)
- 「プロジェクト FUKUSHIMA!」ウェブサイト内 大友良英「納涼！盆踊り」〈http://www.pj-fukushima.jp/page/bon_message01.php〉(2017年10月22日最終確認)
- 「プロジェクト FUKUSHIMA!」ウェブサイト内 「about」 〈<http://www.pj-fukushima.jp/about/>〉(2017年10月22日最終確認)
- エリック・ホブズボウム、前川啓治訳、1992「序論—伝統は創り出される」(『創られた伝統』所収 紀伊國屋書店)
- 八尾河内音頭まつり振興会ウェブサイト 〈<http://www.yaokawachiondo.com/2017fes/>〉

guinness) (2017年10月22日最終確認)

読売新聞朝刊 1964年9月9日 野口久光「[家庭ジュークボックス] 国歌集や行進曲
オリンピックにちなんで」

読売新聞夕刊 1964年12月23日「ことしのレコード界」